

小1 こえにだしてよもう 「くじらぐも」

研究主題 「確かな国語力を育むための国語教育の在り方 ～入門期における思考力と想像力を養うための学習活動の工夫について～

日上市立豊浦小学校 作間 薫子

1 はじめに

今春4月から、新しい学習指導要領が全面実施となる。OECD（経済協力開発機構）のPIISA調査などからは、思考力・判断力・表現力などを問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題が見られたことなどから、中央教育審議会が、平成20年月に答申を行った。そこでは課題を踏まえた上で、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成などを基本的な考え方として、学習指導要領の改善の方向性が示されたのは衆知のことである。

国語科の改善の基本方針の中に、「小学校においては日常生活に必要な国語の能力の基礎を確実に育成する」とある。その改善の一つとして「日常生活に必要とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想などの言語活動を行う能力を確実に身に付けることができるよう、継続的に指導することとし、課題に応じて必要な文章や資料等を取り上げ、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決していく能力の育成を重視する」を挙げている。そこで、改めて学習指導要領解説「国語編」を読んでみると、国語科の目標「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」の中で「思考力や想像力」を「言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力」であり、言語感覚とは、「言語の使い方の、正誤・適否・美醜などについての感覚」と述べている。以上の文言を読むと、国語科授業での言語活動が他の教科、領域の教育活動の基盤となり「自ら学び自ら考える力」つまり「生きる力」をはぐくむものとして機能していかなければならないことが分かる。

そこで、小学校1年生の入門期の指導では、主体的に自分の言葉で考え、イメージを広げて課題解決していける理解力や表現力の基礎を育てていくことが大切であると考え。

しかし、今の児童の実態を考えると、長い文章を自力で読むことができず、友達の前での発表も緊張してできない児童もいる。今までの自分の指導を振り返ると、文章を正しく読み取るための学び方の指導とその後の、自ら考え表現する活動にどうつなげるかという点が不十分だったと思われる。読んだことは、表現することを通して初めて交流できる。特に文学的な文章の読み取りには、想像力を鍛え、表現することが大切となってくる。進んで言葉に着目し、自ら考える子どもを育てたい。そして、自分の読みについて自信をもって交流できる思考過程を重視した指導へと授業を改善したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

- (1) 児童の意欲が持続する学習活動の仕方と支援の手立てを工夫すれば、児童は学び方を知り、時間や事柄の順序や場面の様子を押さえながら想像豊かに読む力が育つであろう。
- (2) 児童が楽しんで書くことができるような具体的な相手や場を設定すれば、目的や意図に応じて適切に表現する力を育てられるであろう。
- (3) 自分の考えや思いを文章に書かせ、学習形態を工夫しながら伝え合う機会を数多く経験させれば、表現する力を高めることができるであろう。

3 実践事例

(1) 学習指導案

第1学年3組 国語科学習指導案

指導者 作間 薫子

1 単元 こえにだしてよもう 「くじらぐも」

2 目標

- (1) 登場人物の様子などを想像したり、声に出して読んだりして物語を楽しもうとする。
(国語への関心・意欲・態度)
- (2) 相手に分かりやすいように、順序を考えながら話したり、大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くことができる。
(話すこと・聞くこと的能力)
- (3) 想像したことから書くことを決め、雲に乗った時の気持ちや雲と話したいことを考えて書くことができる。
(書くこと的能力)
- (4) 話の内容の大体が分かり、場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読んだり、語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読したりできる。
(読むこと的能力)
- (5) 新出漢字や片仮名の言葉を正しく読んだり書いたりできる。
(言語についての知識・理解・技能)

3 指導にあたって

体育の時間という身近な現実から、一転してくじらぐもが現れ、子どもたちとくじらぐもの交流が校庭と空で繰り返し行われる。場面は大空のくじらぐもの背中に移り、時間がきて現実の世界に再び戻るという構成となっているファンタジーである。自分と同じ1年生が大空で遊ぶ内容に共感する部分が大きく、会話文を声に出して読むことも心地よく親しみやすく楽しい教材である。

児童は朝の読書をはじめ、読み聞かせを楽しみにしている。しかし、読書の様子を見ると、文章を読まず、挿絵を目で追うだけの児童もいる。また、これまでに「ことばをいれてぶんをつくろう」「はなのみち」「おむすびころりん」「大きなかぶ」の学習で挿絵や文章から様子や気持ちを想像したり、吹き出しを書いたり、音読したり、読み取ったことを動作化する経験をしてきた。音読については、拾い読みの児童もいて、挿絵から分かることを叙述と結びつけることが困難な傾向が見られる。書くことを見つけた

り、自分の思いを文章に表すことを苦手とする児童もいる。

そこで、指導にあたっては、くじらぐもと子どもたちの会話や行動が書いてある文章を「～が～する」の主述の関係を手がかりに探させていく。会話の読み方は、なぜそう読むのかを言葉に

着目しながら、自分の経験と関連づけて考えさせ、自分の言葉で話せるような過程を大切にしていき、一斉読みや役割読みをしながら音読の工夫へ広げさせたい。

また、挿絵と文章を照らし合わせたり動作化を取り入れたりしながら登場人物になりきり、豊かに想像をふくらませることができるようしていきたい。くじらぐもの背中に乗った時の吹き出しを書く前には、フィンランド・メソッドのマインド・マップを取り入れることで発想力を伸ばし、言葉に着目した想像ができるようにしていく。その際、登場人物の気持ちを想像しやすいワークシートを準備する。書いた吹き出しをペアや3人グループで交流していく中から、自分の考えを深めたり友達の考え方のよさを感じ取ったりさせていきたい。その後は、学習してきたことを生かして、自分の見つけた雲のお話作りをする。そこでは、想

実態調査 計31名 10月11日		
・みんなの前で話すことは好きですか。	好き18人	あまり好きでない10人 嫌い3人
・作文を書くことは好きですか。	好き19人	あまり好きでない8人 嫌い4人
・音読することは好きですか。	好き22人	あまり好きでない8人 嫌い1人

像したことをペアや3人グループで話す活動と書く活動の関連を図りながら表現する力を高めるとともに、作ったお話を楽しく読むことを味わわせたい。

4 指導計画（16時間取り扱い）

学習過程	時間	主な学習内容	指導上の配慮事項	評価規準
つかむ	3	<ul style="list-style-type: none"> ・題名について考えたことを発表する。 ・全文を読み、挿絵をもとに、話の筋をつかむ。 ・初発の感想を書き発表する。 ・新出漢字や片仮名の練習をする。 ・学習の見通しをもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・雲の形はいろいろな物に見えることに気付くように雲の写真を提示する。 ・挿絵カードを自力で並べることにより、「いつ、どこで、だれが、何をした」かを話すことができるようにする ・書くことが見つけられるように、好きなところ、おもしろいところにサイドラインを引く ・本単元の学習の進め方を今までの物語文の学習の進め方を振り返ることで見通しがもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・物語に興味をもち、進んで読もうとしている。「目標の(1)」 ・話の筋の大体をつかみ、好きな場面やよかった場面を見つけ発表することができる。「目標の(4)」 ・好きなところやおもしろいところを進んで見つけようとしている。「目標の(1)」
調べる	9	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちとくじらぐもの出会いの様子を読み取る。 ・子どもたちとくじらぐものが声を掛け合い誘い合う様子を読み取る。 ・くじらぐもに飛び乗ろうとする子どもたちの様子と応援するくじらぐもの様子を読み取る。 ・くじらぐもと一緒に空を旅する子どもたちの様子や気持ちを読み取る。 ・くじらぐもと別れる子どもたちの気持ちを想像する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちのまねをするくじらぐもの様子を読み取れるようにするために、文中の助詞「も」のはたらきを話し合う。 ・地の文とくじらぐも、子どもたちに分かれて音読し、声の大きさな考えたり話し合ったりすることで、吹き出しを書けるようにする。 ・言葉に着目して読んでいく力をつけるためにくじらぐもと子どもたちの行動や会話のカードを自力でノートにはる。 ・海・村・町の方へという行き先の言葉に着目したマインドマップを使って想像を広げてから、吹き出しのワークシートに子どもたちの言っていることを書くようにする。 ・「さようなら。」の後に見送る子どもたちの気持ちを加えた音読をすることで、次時のくじらぐもへの手紙を書くことへの意欲を高め 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章や挿絵をもとに子どもたちとくじらぐもの様子や気持ちを考えて音読や動作化をすることができる。「目標の(4)」 ・くじらぐもと子どもたちの位置関係や気持ちを考えて音読ができる。「目標の(4)」 ・子どもたちとくじらぐもの会話や行動を正しくとらえることができる。「目標の(4)」 ・空の旅の様子を思い浮かべて音読したりその時言ったことを3人グループで交流することができる。「目標の(1)(2)(4)」 ・くじらぐもへの感謝の気持ちや次の願いなどにふれた吹き出しを書くことができる。「目標の(4)」

まとめ る	(本時)	・くじらぐもにお礼の手紙を書き、交流する。	る。 ・簡単な文章構成，はじめ・中・終わりを考えながら，楽しかったことを手紙に書くようにする。	・くじらぐもとの楽しかったふれあいについて進んで手紙に書くことができる。 「目標の(1)(3)」
ひろげ る	4	・自分が見つけた雲の絵を描き，雲と話したいことを入れてお話を書く。 ・書いたお話を読み合う。	・発想を広げ，想像した話が書けるように「いつ・どこで・だれが・どうした」が記入しやすいマインド・マップを使う。 ・友達の作品の感想で，表現の仕方のよさに気付いて話している児童を賞賛する。	・句点や文字の間違いに気を付けながら順序よく書くことができる。 「目標の(3)(5)」 ・自分の書いたお話を進んで発表したり，友達のお話のよさに気付くことができる 「目標の(1)(3)」

5 本時の指導

(1) 目 標

「くじらぐも」を読んで思ったことを，簡単な文章構成を考え，想像を広げながら手紙に書くことができる。

(2) 準備・資料

ア 掛け図(さし絵) イ 児童用ワークシート(吹き出し)
ウ 掲示用くじらの絵カード エ 文字カード オ 手紙プリント
カ ヒントカード キ 清書用手紙プリント ク くじらぐもと自分の掲示物

(3) 展 開

学習活動・内容	指導上の配慮と支援 ○評価
1 前時の学習を振り返り、本時の学習課題を確認する。 くじらぐもさんに、たのしかったきもちをつたえる手がみをかきましょう。	・前時に学習した文章の組み立てとはじめの文を振り返り、本時は「中」の文を書くことを確かめ、手紙を書こうとする意欲を高めていくようにする。
2 全文を音読する。	・登場人物の行動を考えながら音読するように呼びかけるとともに、音読が十分できない児童のそばで一緒に音読し支援する。
3 くじらぐもに手紙を書く。 (1) 4時間目の出来事を振り返り、「中」と「おわり」の文の書き方を確かめる。 ・中「おなか」 見たこと、したこと、思ったこと 感じたこと、お願いしたいこと ・おわり「しっぽ」 あいさつなど	・分かりやすい言葉で説明をし、手紙を書く順序が把握できるようにする。 ・一つの視点から書いて満足してしまう児童や何を書いてよいか分からない児童もいると予想されるため、さし絵やマインド・マップをもとに出来事を振り返ることで楽しかったことが想起できるようにする。
(2) 「中」の文を書く。 ・自分の書きたいことを選び、文章を書く。	・終わる感じにする文例を紹介することで、出す相手を意識したしめくくりの言葉があることにも気づかせたい。
(3) 「終わり」の文を書く。	・主語と述語の続き方に注意しながら、一文を短く区切って書くように助言する。
4 読み合いコーナーやグループの中で	・書き出せない児童には個別に言葉かけをしたりヒントカードを渡したりして支援する。 ・早く終わった児童には、読み直したりもう一文書いたりするように声をかける。 ・見直すポイントを掲示しておき、自分や友達の作品を修正したりよいところを見つけ

<p>発表し合う。</p> <p>5 本時の学習を振り返り、次時の学習について確かめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手紙をもう一度読み直して、清書をしましょう。 	<p>たりする習慣をつけさせたい。</p> <p>○書きたいことを選び想像を広げながら手紙を書くことができたか。</p> <p>(観察・ワークシート)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挙手により振り返りをする中で努力したことを賞賛したり、清書プリントを見せたりして次時の書く意欲が持続するようにする。
--	---

(2) 指導の実際

① 学び方を身につけて「正しく読む」力をつける学習活動と支援の手立ての工夫

ア 単元の導入の工夫

事前に雲の様子や動きを見せておいたり、雲の写真を見ることで、雲の形によっていろいろな物に見えることに改めて気付かせ、題名「くじらぐも」への興味を高める。

「くじらぐも」の全文を読んだ後、この単元の終わりに自分がこれから遊んでみたいなあと思う雲を見つけて、お話作りをすることを知らせる。児童は休み時間や体育の時間に、空を見上げては「くじらぐもだ。」とか「キョウリュウ雲。」「うさぎ雲。」と指さし、自分の書きたい雲を探すようになり書くことへの意欲が高まった。

また、今までの物語文を学習した時の読み取るための手立てをみんなでふりかえることで、見通しをもって学習できるように意欲付けを図った。

イ あらすじをつかむために

話の内容の大体をとらえるために、各自が順不同になった挿絵を順番に並べ替える活動を行った。みんなで正しい順番を確認した後、ノートにはり、いつでもふりかえられるようにしておいた。

ウ 初発の感想を書く

児童の思いを確認するために、書いた。ほとんどの児童がくじらぐもに乗ったことを選んで書いていた。

エ サイドラインや吹き出しで登場人物の気持ちを読み取る

サイドラインは、場面の様子や登場人物の気持ちが想像できるような言葉を選んで短く引くようにしていく。吹き出しに子どもたちが話したことを書いたら、発表では必ず本文中の根拠となる言葉を示し、「どうしてそう思ったか」も話すようにしてきた。今回はサイドラインだけでなく、くじらぐもと子どもたちの様子を正しくとらえるために、くじらぐもと子どもたちのやりとりの場面の文章をプリントしたものを渡してみた。この文はどちらの様子を表しているのか、主述の関係に気をつけながら、一文一文読み、確かめながらカードを並べていく姿が見られた。(資料①)

オ 音読の声の大きさを工夫して読む

役割を決め、呼びかけ合いながら読む活動では、くじらぐもとみんなの位置関係に気をつけながら読むことができ、自然と口に手を当て、空の上に呼びかけるような動作化も伴って声を出している児童もみられた。

「天までとどけ、一、二、三。」が繰り返されている場面の読みでは、だんだん大きな声で読んでいき、子どもたちのくじらぐもに乗りたいという気持ちの高まりを感じ取ることができていた。この場面は、実際に運動場でみんなで手をつないで「天までとどけ、一、二、三。」と声の大きさを変えながらジャンプし、楽しんだ。

カ くじらぐもの拡大絵と子どもたちの人形を作る

物語の中に入り、登場人物と同化してくじらぐもに飛び乗ったことを想像させる手

立てとして作った。自分の人形を手に、くじらのどこに乗るか、思案している様子が見られた。場所を決め、貼り付けるととても満足そうだった。(資料②)

② 「読むこと」と「書くこと」をつなげる

ア 相手や目的意識を具体的にもたせる

「くじらぐもさんに手紙を書こう」と書く相手を決めれば、子どもたちは、一緒に空の旅をしたくじらぐもにお礼の手紙を出そうという思いでいっぱいになるだろう。

ここでは、既習の「てがみをかこう」の学習を踏まえ、手紙の基本的な形式の指導をしていく。「はじめ(あいさつ)」・「中(語りかけ)」・「終わり(終わりのあいさつ)」のような簡単な文章構成を指導し、「はじめ」と「終わり」の文章は、ある程度定型化した例文を紹介するようにしていく。「中」部分を書く授業の板書には、くじらぐもの形で文章構成を視覚的にとらえさせるようにした。(資料③)

イ 自分の考えを深めるノートとワークシートの工夫

学習の過程が分かるように、ノートには使ったワークシートなども、貼り付けておくようにする。

くじらぐもの背中に乗った時の吹き出しを書く前には、フィンランド・メソッドのマインド・マップを取り入れることで発想力を伸ばし、言葉に着目した想像ができるようにしていく。授業の中で、くじらぐもが連れて行ってくれたところと、見たものの様子を想像する時、サイドラインを引いた箇所を確認したら、挿絵でも確かめ、「うみのほうへ」「むらのほうへ」「まちのほうへ」とマインド・マップに視写する。それから、各自が見えたものや楽しい気持ちなど思いついたことを関連図に書き込んでいく。それから、吹き出しのワークシートへの記入を行った。(資料④)

くじらぐもへの手紙を書く時には、マインド・マップと吹き出しのワークシートを見ながら進められたので、くじらぐもに語りかけるような文章を書くことができた。自分が見つけた雲のお話を書く時も、このマインド・マップを使った。今度は、書く時の観点「いつ」「どこで」「雲の名前」「雲が話したこと」「自分が話したこと」を関連図に示したワークシートを作成して、児童が書き込めるようにした。

(資料⑤)

ウ 書くことが苦手な児童への対応

できるだけ個別指導に努めるが、回りきれないことがあるので、ヒントカードを準備しておき、自力で書き込めるようにした。1時間がんばって手紙を書く活動に取り組めたことはよかった。(資料⑥)

エ 相互に学び合う学習

ペアまたは3人グループで書いたものを読み合い、友達の考えにふれる機会を設定した。何度も繰り返す中で、自分が書いていないことなど友達の考えのよさを見つけられるようになってきた。(資料⑦)

4 研究の結果

(1) 仮説1について

1年生という入門の時期なので、段階を踏んだ学習活動の流れとその支援の手立てを心がけた。「言葉に出会わせる」ことを大切にして、手立てを考えていった。「この大事な言葉から考えたこと、思ったこと、気がついたことを発表しましょう。」という投げかけを常にして、言葉に着目させるようにした。ペアで3人グループで、そしてみんなで一緒に読み進めて行く中でイメージをもてるようになり、想像する力が育ってきた。読み取ったことを役割読みなどをして繰り返し音読することで、読みが深まってきた。

(2) 仮説2について

この単元では、今までの学習のまとめとして「くじらぐもさんへの手がみをかこう」を、発展として「じぶんが見つけたくもとあそんだおはなしをつくろう」の書く活動を設定した。どちらも、マインド・マップを使って書くことの観点を明確にしたので、児童は取り組みやすかった。特に、「くじらぐも」の学習で多く出てきた会話文を入れて書けるようになったことがよかった。これまでの音読したり視写したりする活動を通して、気持ちを表現する会話文の大切さが意識されたからであると考えられる。ただ、かぎ「。」をつける範囲や原稿用紙の正しい表記の仕方などまだまだ不十分な点が多く見られた。

(3) 仮説3について

学習する内容にもよるが、この単元ではできるだけ、ペアでまたは3人で学び合う時間を設定するようにした。音読の工夫でも、文章表現でもアドバイスをもらうことで、「もっと上手に音読しよう。」とか「もっと詳しく書いてみよう。」と活動の意欲が高まり、表現力がついてくる。実際、音読の声の大きさや速さ、調子を変えながら音読の練習をしたり、書いた自分の文章を読み直して、言葉を補っている児童も見られた。

そのためには、一人一人の児童が、友達のよいところに気付くようにしていかなければならない。自分の文章にはない言葉の使い方や比喻などのよいところを見つけがえること、「～を詳しく書くともっといいね。」という相手のことを認めた上でのアドバイス、アドバイスを受けてもう一度自分の文章に戻り、修正しようとする態度など、1年生の発達段階ではなかなか難しいことであるが、交流の機会を設けることで、読み合う聞き合うといった活動を児童が自然に進んで行うようになってきた。

5 今後の課題

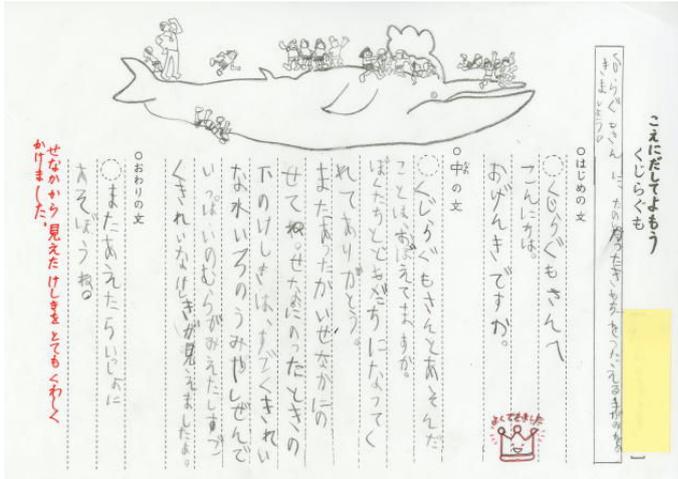
- (1) 毎時間、担任の言うふりかえりの観点を聞いて、あてはまる場所に挙手をするという自己評価をしてきた。途中から一言感想なども書かせるようにしてきたが、「～ができてうれしかった」のような感想が多かったため、自己評価の感想も書く観点を明確にして児童に投げかけなければ機能しないことがよく分かった。児童の発達段階に合った短い時間でできる効果的な自己評価の方法を考えていきたい。
- (2) 友達の文章を読んだり、音読を聞いたりして感想を言うことができる、よい読み手や聞き手を育てるために今後も交流の機会を設定していく。
- (3) 一人一人への支援の手立てがまだ十分でない。特に、活動が滞っている児童への適切な支援の仕方をもっと考えていきたい。
- (4) 1年間を見通して、学級の児童にどんな力をつけたいかを考え、指導の重点化を図り、指導に臨むことが大切である。

6 おわりに

「読むこと」と「書くこと」をつなげた単元構成を考えたが、一つの活動をするのに、児童が慣れていないせいもあり、非常に時間がかかった。今後も多様な活動の経験を通して、学習の仕方が分かればもっと効率よく時間が使えると思う。

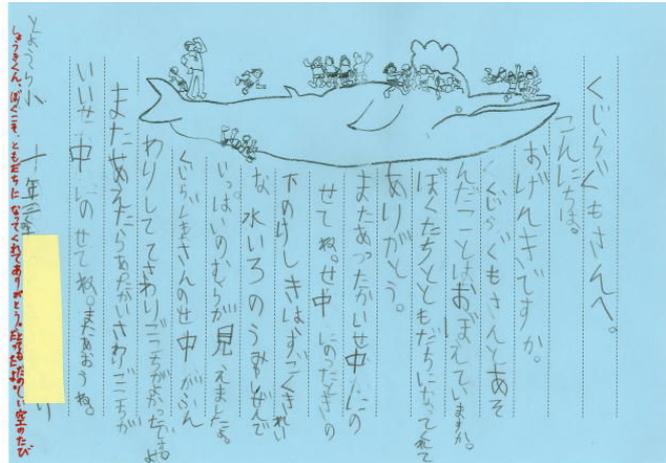
参考図書

- ・小学校学習指導要領解説 国語編 文部科学省
- ・新小学校国語科重点指導事項の実践開発 小森 茂 編著 明治図書
- ・「話すこと・聞くこと」の言語活動例の展開 大越和孝・成家亘宏・藤田慶三 編著 東洋館出版社
- ・「読むこと」の言語活動例の展開 大越和孝・成家亘宏・藤田慶三 編著 東洋館出版社
- ・フィンランド・メソッド入門 北川達夫&フィンランド・メソッド普及会 経済界 <資料>



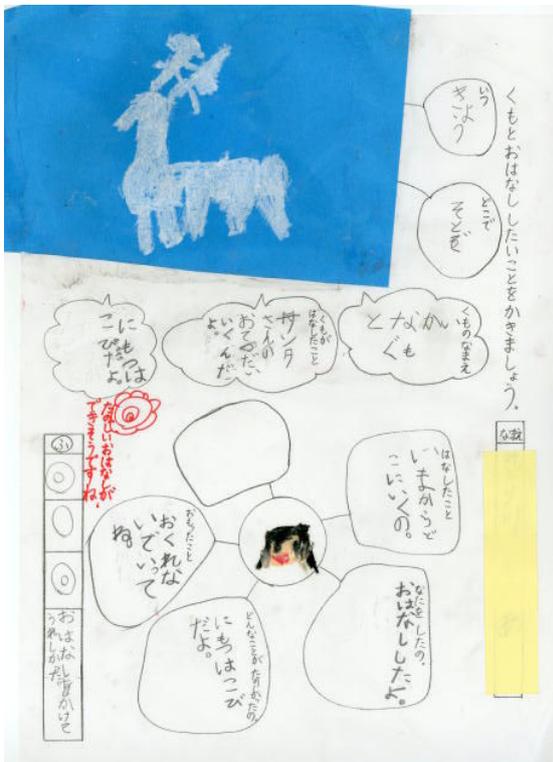
くらぐもへの手紙のワークシート

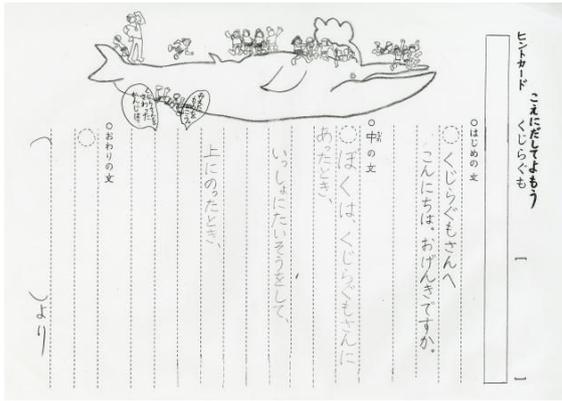
くらぐもへの手紙の清書



資料⑤

自分の見つけた雲のお話を書く時のワークシート





資料⑥ ヒントカード

資料⑦



くじらぐもへの手紙の下書きを3人グループで読み合う。



清書をペアで読み合う。

資料 自分の見つけた雲と遊んだお話作り

トナカイぐもさんとあそんだよ
1の3 ○○○ ○○○○

きのう、空をみあげたら、空トナカイが出てきました。
わたしは、
「いまからどこに行くの。」
とききました。空トナカイは、
「サンタさんのお手つだいにいくんだよ。」
といました。わたしは、
「お手つだいてなかに。」
とききました。空トナカイは、
「にもつはこびだよ。」
といました。空トナカイはわたしに、
「どこに行くの。」
とききました。わたしは、
「ひいおばあちゃんとおふろに行くの。」
といました。車でいくと、空トナカイ もついてきました。はしっていました。
わたしが、おふろについたら、空トナカイもとまりました。わたしは、
「おくれないうってね。」
といました。

児童の作品

きょうりゅうぐもとあそんだよ
1の3 ○○○ ○○○

金よう日、ぼくは、いえのちかくのさかの下で、
きょうりゅうぐもとあいました。
ぼくは、
「きょうりゅうぐもくん、せなかにのせてくれる。」
といました。きょうりゅうぐもは、
「じゃあ、すこしね。もうすぐおう ちにかえって、
ごはんをたべなくちゃ。」
といました。よくけしきが見えて、ぼくのいえも見えました。
ぼくは、やさしいきょうりゅうぐもが大すきになりました。ずうっと、のっていたいとおもいました。
ぼくは、さいごに、
「さようなら。」
といました。きょうりゅうぐもは、
「また、いつかくるよ。」
といて、おうちにかえっていきました。